
緑が歌う物語

在月宵花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑が歌う物語

【Nコード】

N8868B

【作者名】

在月宵花

【あらすじ】

緑豊かな小さな国の、のどかで可愛いファンタジイ。

1..インシグニア皇国

緑豊かな、小さな国がありました。

青々と広がる森林の中央にそびえたつのが、インシグニア城。インシグニア皇国の皇族が住む城です。

インシグニア皇国は国土の約三分の二を森林に覆われていますが、もちろん平地に栄えている街もあります。しかし、皇族はそのような世俗とは隔離されて生活していました。

なぜなら、インシグニアの皇族として生を受けた者は皆、自然と協和する不思議な能力を持っているからです。その能力は、自然の傍にあってこそ力を発揮するのです。

皇国の民はその力を『自然協和』^{アコードディア}と呼び、敬っていました。

「ユウル、ユウル！」

インシグニア城の庭を、一人の青年が歩き回っています。

インシグニア第一皇子、マーセル皇子です。

彼の呼んでいるのは、妹姫の名前。二人揃って皇と皇妃にお目通りをしなければならぬのに、その姿が見当たらないのです。

「まったく、あのお転婆姫は……」

マーセル皇子はぼやきますが、その表情に陰しはありません。彼は妹姫のそういうところが好きだからです。

「そよ風よ。ユウルの居場所^{アコードディア}は分かるかい？」

マーセル皇子は『風の自然協和』という能力を持っています。風に語りかけ、失せ物探しをすることなど訳ありません。

そよそよと皇子の耳に答えが囁かれます。

「裏庭で小鳥たちと遊んでいるのだね。ありがとう」

マーセル皇子はそよ風に言われたとおり、裏庭へ向かいました。

裏庭には、晴れやかな空色のドレスを纏った少女がいました。

インシグニア第二皇女、ユウル姫です。

彼女の肩や腕、指先に何羽もの小鳥たちが止まり、さえずっています。

「まあ、イエーナ、おまえはまた悪戯をしたのね。ごまかしても駄目よ、リムがそう言っているわ。仲良くするのが一番よ」

ユウル姫は楽しそうに小鳥たちとお喋りをしています。彼女の持つ能力は、あらゆる動物たちと話が出来る『命の自然協和^{アコーデイア}』です。

「ユウル。探したぞ」

「マーセルお兄様！」

ユウル姫が振り向くと、苦笑を浮かべたマーセル皇子が立っていました。

「父上と母上がお呼びだ。朝食の時に伝えただろう？」

「ごめんなさい、お兄様。すっかりお喋りに夢中になってしまっ忘れていたの」

マーセル皇子はユウル姫を立たせて、スカートに付いた草を払ってやります。

「さあ、急いで行こう」

「はいっ」

二人は、皇と皇妃の待つ玉座の間へと駆け出しました。

2…リストウル姫を助けに

「マーセル、ユウル。困ったことが起こったのだ」

インシグニア皇は、立派なあごひげをさすりながら言いました。

「セレスティ王国へ嫁いだリストウルのことなのだが」

「リストウルお姉様がどうなさったのですか!？」

ユウル姫は思わず大きな声を上げてしまい、マーセル皇子にたしなめられます。

インシグニア王国第一皇女、リストウル姫。

マーセル皇子の妹でありユウル姫の姉である彼女は昨年、友好関係にあるセレスティ王国へ嫁いでいます。現在は、セレスティ王国皇太子、レイバー皇太子妃です。

「つい先日から、リストウルが病に臥せっていると言うのだ……」

広大な“蒼穹の湖”を抱くセレスティ王国は、水に恵まれた国です。

『水の自然協和』^{アコordeア}の能力を持つリストウル姫との相性が良く、進められた結婚だったのですが……。 「リストウルが、水に関する悪事に共鳴して体調を崩しているかも知れないのですね？」

「そうなのだ」

マーセル皇子の言葉に皇はうなずきました。

『自然協和』^{アコordeア}の能力は、良いことばかりをもたらすわけではありません。せん。

自然が傷つけられたり破壊されたりすると、それに共鳴して病気になるってしうことがあるのです。

「わしと妃は、この国を動けぬ。マーセル、ユウル。お前たちはセレスティ王国へ行き、その原因を突き止めてリストウルを救ってほしいのだ」

「分かりました」

マーセル皇子は力強く答えました。

「必ず、リストウルお姉様をお救いします!」

ユウル姫も負けじと声を上げます。

「うむ、任せたぞ。アスラドとアクイナも連れてゆくが良い」

アスラドとアクイナは双子の兄妹で、マーセル皇子ら兄妹のいここです。

アスラドは『大地の自然協和』^{アコーデイア}、アクイナは『魚の自然協和』^{うおアコーデイア}の能力を持っています。皇みずから指名したということは、今回の事件解決に二人の能力が必要不可欠なのに違いありません。

マーセル皇子とユウル姫はさっそく二人のもとへ行き、事の次第を話しました。

「まあ、リストウルが！？ それは放っておけないわ！」

アクイナが叫びました。彼女はリストウル姫と同じ年で、一番の親友なのです。

「そう言うことなら喜んで手を貸すぜ」

アスラドも鷹揚に請け負ってくれました。

四人は明日の早朝に発つことを決めました。

3..風龍

翌朝。

太陽が東の森から顔を出したとき、すでにマーセル皇子、ユウル姫、アスラド、アクイナの四人は準備を調え終えていました。

マーセル皇子を先頭に、四人はバルコニーに立っています。

セレスティ王国は、インシグニア皇国から山脈を隔てて南西側にあります。地を行けば、数十日もかかる道のりです。とても、間に合いません。

だから四人は、空を行くのです。

「危ないから下がっていて」

マーセル皇子は三人を遠ざけると、目を閉じ、胸に手を当てて風に語りかけます。

「我らが国土にまします風の御神よ。風龍よ。我が呼びかけに応え給え。荘厳なる姿を現し給え」ゴォツ、と突風がうなりを上げました。

四方から、風がマーセル皇子の近くへ吹き寄せて来ます。それは渦を巻き、だんだんと形を成していきます。

「すべての風は我が許に――」

マーセル皇子は、胸元の手をゆっくりと伸ばしました。

すると、風の渦はみるみる形を得、まばゆい純白の龍と成ったのです。

「風龍、ウィン・ディアティ」

マーセル皇子が名を呼ぶと、風龍はゆっくりと頭をもたげました。

「風に協和せし皇子、マーセル。そなたの声に応えん」

龍族は、最も神に近い種族です。それゆえ誇り高く、容易に姿を現すことはありません。

『風の自然協和』^{アコーデリア}を持つマーセル皇子の呼びかけだからこそ、こうして姿を現しているのです。

「私達をセレスティ王国まで送り届けて頂きたいのです、ウィン・ディアティ。我が妹、リストウルが病に臥せっているのです」

風龍はふりと首を振りました。

「このところ、水龍の姿を見ぬ。セレスティ王国で異変が起きているのは間違いないであろう。……乗りなさい。すぐに送ろう」

マーセル皇子はここでやっと、手招きをして遠くにいた三人を呼びました。

ユウル姫は、風龍を見るのは初めてです。

「風龍様、初めまして。ユウルと申します」

風龍の鼻の先でぺこりとお辞儀をしました。

「ウィン・ディアティだ、マーセルが妹、ユウルよ。さあ、早く我が背に乗るが良い」

ユウル姫は、マーセル皇子の手を借りて何とか風龍の背に乗りました。アスラド、アクイナも後に続きます。

「風龍は人を背に乗せてくれるのだな。地龍は嫌だと言っていたが」

『大地の自然協和^{アコーディア}』により地龍と繋がりを持つアスラドがこぼすと、風龍は体を揺らしました。どうやら笑っているようです。

「大地に協和せし者、アスラドよ。地龍は空を行くより、地中を行くのを好むのだ。人を乗せて地中は進めまい」

「そう言うことか……」

アスラドも風龍につられて少し笑いました。

マーセル皇子が最後に、風龍の背に乗り込みました。

「蒼穹の水を湛えしセレスティ王国へ、いざ参らん」

風龍は優雅に、ぐんぐんと天高く舞い上がりました。

4…セレスティ王国

マーセル皇子、ユウル姫、アスラド、アクイナの四人を背に乗せた風龍は、ゆっくりと下降をはじめました。

雲を抜けて眼下が開けると、そこには紺碧の湖が広がっていました。

「まあ、とっても綺麗！」

ユウル姫が歓声をあげます。

「かの有名な“蒼穹の湖”だ」

風龍が答えました。

「確かに美しい。だが——水龍の息吹が感じとれぬ」

「それは、リストウルが病であることが関係して……？」

アクイナが心配そうに表情を歪めます。

「セレスティ城へ行って事情を聞かなければ何も分かりはしない。すべてはそれからだ」

マーセル皇子は努めて、力を込めて言いました。

“蒼穹の湖”の東側にそびえるセレスティ城が近づいてきました。城内がざわついているように見えるのは、風龍の姿を見つけたからでしょう。

「ウィン・ディアティ。あの庭園に降りて頂けますか」

マーセル皇子は、芝生の広がる城内の庭園を指して言いました。

「了解した」

風龍はゆっくり速度と高度を落としていき、無事着陸を果たしました。

マーセル皇子はひらりと風龍の背から飛び下ります。

「お騒がせして申し訳ございません。インシグニア皇国第一皇子、マーセルと申します。セレスティ国王へお取次を願います」

「それには及ばない」

城内から、マーセル皇子と変わらぬ年頃の青年が颯爽と姿を現しま

した。

「お初にお目にかかる。セlesti王国皇太子、レイバーと申す。以後、お見知り置きを」

マーセル皇子は、深く礼をしたレイバー皇太子の手を取って握りました。

「貴殿が、レイバー皇太子ですか。マーセルです。妹がお世話になっております」

「私という者が付いていながら今回のような事件……誠に申し訳ない。リストウルに会ってやって下さい。臥せってはいますが、話は出来ます」

レイバー皇太子は早口にそう言うと、さっさと先を行こうとします。

「レイバー皇太子。しばしお待ち願えますか」

やんわりと声をかけ、マーセル皇子は振り返りました。

「ウィン・ディアティ。あなたの助力に深く感謝いたします」

マーセル皇子は敬意を込めて頭を垂れます。

「風はいつでもそなたの傍にある。マーセル、ユウル、アスラド、アクイナ。無事を祈る」

竜巻が空気にほどけていくように、風龍の姿は消えてしまいました。

「マーセル殿、重ねて申し訳ない。どうも気が急いてしまって、氣遣いできずに……」

レイバー皇太子は申し訳なさそうに謝りました。

「お気になさらず、レイバー皇太子。後ろに控えたるは、我が妹ユウル、いところであるアスラド、アクイナと申す者です。共にリストウルを見舞っても構いませんか？」

「もちろんです。ユウル姫、アスラド殿、アクイナ殿。行き届かないことが多く、ご迷惑をかけます。……こちらです、どうぞ」

今度こそ、レイバー皇太子は四人を連れて廊下を歩き出しました。

5..すすり泣く夢

リストウル姫は、紺色のカーテンに包まれた寝台に横たわっていました。

“蒼穹の湖”よりも更に深い青色をした豊かな髪が、ゆるやかなウエーブを描いて広がっています。

顔色はさすがに優れませんが、レイバー皇太子の後ろに懐かしい姿を見つけたからか、表情が緩みました。

「レイバー様、これは夢ではないですわね？ お兄様、ユウル……アクイナにアスラドまで」

「夢ではありませんわ、リストウルお姉様！ ユウルはこうしてお傍におります！」

寝台の端へ駆け寄ったユウル姫に、リストウル姫は優しく微笑みかけます。

「リストウル……一体何が起きているのだ？ 何か異変を感じたのでは？」

マーセル皇子が問うと、リストウル姫はキュツと表情を引き締めました。

「お兄様。水龍の力が弱まっているようなのです。けれどわたしには、その原因がわからないのです。ただ……病になる前日に夢を見ました」

リストウル姫はゆっくりと記憶を辿りながら、不思議な夢について語りはじめました。

リストウル姫は、“蒼穹の湖”の畔に座っていました。

湖面は日光を受けてキラキラと輝いています。

しかし、リストウル姫の耳が捕えたのはすすり泣く声でした。

「誰が泣いているの？」

リストウル姫は声をかけますが、答えは返ってきません。すすり泣

きもやみません。

「湖のさざ波さん。あなたには聞こえて？」

リストウル姫はつぶやくように、さざ波に語りかけます。『水の自然協和』の力を持つ彼女は、水と会話することができのです。^{コーディア}

「聞こえる？ そう……わたくしの空耳ではないようね……」

リストウル姫は立ち上がると、手を胸に当てて念じました。

（水龍、タオ・ディアティ。我が呼びかけに応え給え）

いつもならば、すぐに水龍の声がリストウル姫の脳裏に響いてくるはず。けれども返答はありません。

リストウル姫は、胸によぎった懸念を口にしました。

「泣いているのは……タオ・ディアティ、あなたなのですか？」

そう問いかけたところで目が覚めてしまった、とリストウル姫は言いました。

「わたくしは、やはり泣き声の主は水龍だと思います。彼女を悲しませる何かが、“蒼穹の湖”で起こっているのではないでしょうか……」

「分かった。ありがとう、リストウル。それで十分だ」

マーセル皇子はリストウル姫を安心させるように微笑みました。

「レイバー皇太子。私達は一度“蒼穹の湖”へ行って来ようと思います。夕刻までには戻りますので、リストウルをよろしくお願いいたします」

「分かりました。夕食の用意を調べておきます。お気をつけて」

レイバー皇太子はリストウル姫に寄り添ったまま、深く頭を下げました。

部屋を退出すると、アクイナがふうっと大きく息をつきました。

「リストウルは病は心配だけれど……少し安心したわ。良い方ね、レイバー皇太子って」

「リストウルにべた惚れだったな」

横からアスラドも口を挟みます。

「アスラド、もう少し言葉を選ぶべきじゃないか？」

マーセル皇子はたしなめますが、アスラドはどこ吹く風。二人はあまり、馬が合わないようです。

「あれだけ大切にされているなんて、リストウルお姉様がうらやましいわ」

ユウル姫は夢見がちに瞳をうるませています。

マーセル皇子はパンパンと手を打ちました。

「さあ、その話はここまで！ あと一仕事、“蒼穹の湖”までひとつ飛びだ」

6..蒼き世界へ

「お兄様、“蒼穹の湖”まではどうやって行くのですか？　また風龍様をお呼びしますの？」

ユウル姫が問うと、マーセル皇子は首を横に振りしました。

「いいや。これくらいの距離ならば、風龍を呼ぶまでもないよ。風に乗って行くんだ」

マーセル皇子は両手を差し出します。

「皆、手を繋いで」

「はいっ」

ユウル姫は嬉しそうにマーセル皇子の右手を取りました。

左手はというと、アスラドが取る気配を見せないため、アクイナがちらりと非難の眼差しを向けながらその手を取ります。彼女とユウル姫の間にアスラドは収まりました。

「つむじ風よ。我らを“蒼穹の湖”へ運んでおくれ」

マーセル皇子の言葉が終わるか終わらないかの間に、ぶわっと風が四人を取り巻いて地から足を浮かせていました。

「凄いわ！　私、浮いている！」

感激したようすのユウル姫の声。

「絶対に手を離してはいけないよ。さあ、行こう！」

四人は手を繋いだまま、空中へ舞い上がりました。風龍に乗っていた時ほど高度は出ませんが、今度は自分たちの体だけが浮かんでいるのでスリルがあります。

「大丈夫なの、マーセル？　急に落ちたりしない？」

アクイナは少し不安なようです。

「大丈夫。もうすぐ着くよ」

広葉樹の林を越えて、四人はやわらかな草の生えた湖の畔へ着地しました。

「ありがとう、つむじ風」

一唸りして、つむじ風は去って行きました。マーセル皇子によると、「お安いご用だ、またいつでも呼んでくれよ!」と言い残していたそうです。

「ここの土の話だと、どうやら湖の水質に異変が起きているらしい。詳しいことはわからんが……」

地面に手を当てていたアスラドが言いました。彼の持つ『大地の自然協和』^{コーディア}の力で、土と会話をしていたのです。

「なら、わたしの出番ね」

アクイナはにっこり笑いました。

「水質のことは、実際湖に棲んでいる生物たちに聞くのが一番。マーセル、わたしちよっと潜ってくるわ」

「分かった。頼むよ」

アクイナは、スツと両手を耳に付けて真っ直ぐに伸ばしたかと思うと、次の瞬間にはしなやかに水中へ身を躍らせていました。

湖や海など、水中の世界は地上世界よりも遙か昔から存在しています。そのため、水中の世界は独立しているのです。総称して『蒼き世界』と呼びます。

アクイナの持つ『魚の自然協和』^{うお}の能力は、その『蒼き世界』の生物に同調する力なのです。

だからアクイナは、水中でも自由に呼吸をすることができます。

まるで魚のように優雅に、スイスイとアクイナは泳いでいきます。

目指すは、水中の生物たちが暮らす“水都”^{すいと}です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8868b/>

緑が歌う物語

2011年1月14日14時39分発行